

Title	ハプスブルク朝オーストリアのミリテア・アカデミーにおける第二言語教育：主としてチェコ語教育について： 多言語社会の中の第二言語学習の一風景：(その2)
Sub Title	
Author	松岡, 弘(Matsuoka, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2011
Jtitle	日本語と日本語教育 No.39 (2011. 3) ,p.89- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20110300-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハプスブルク朝オーストリアの ミリテア・アカデミーにおける 第二言語教育：主として チェコ語教育について

——多言語社会の中の第二言語学習の一風景：その (2)——

松 岡 弘

1. はじめに

筆者は先に「多言語社会の中の第二言語学習の一風景」と題して、主として第一次世界大戦前のハプスブルク王朝下のオーストリアでチェコ人とドイツ系オーストリア人の家族間で行われていたヴェクセル (Wechsel＝子供交換) を紹介した。これは相手方の言語を学ぶことを主な目的として、子供を一定期間交換しあう民間レベルの学習形態であり、国や学校といった制度の外にあって特定の教師は存在せず、学習内容や方法も自然に任された外国語の習得方法であった。

それでは、これと対極の位置にある方法があるとするれば、それは何であろうか。筆者はそうした素朴な疑問と関心をもつようになり、その結果、同時代のハプスブルク朝オーストリアにおける軍隊内での第二言語学習ないしは軍人兵士のための言語教育を本稿で取り上げるようになった。

勿論、このことを考察の対象とするに至るには、以前から筆者に内在していたあるきっかけと可能性への期待がある。きっかけとは、この数年来コメニウス (Komenský, Comenius) の言語教育思想との関連でかかわってきた主に 19 世紀から 20 世紀にかけてのチェコ並びにオーストリアにおける第二言語教科書・教材の中に、軍籍を持つ著者が含まれているのに気づ

かされていたことである。

それから、軍隊の中の第二言語教育といえば、第二次世界大戦中のアメリカの Army method（アーミー・メソッド）が有名で、その成果は伝説となり、方法や内容もかなり正確に知られている。では、時代も地域も全く異なるが、かの地にアーミー・メソッドのように「軍隊式教授法」として特定化できるようなものが存在しただろうか。この点も筆者の関心事であった。

そして、最大のものは、軍隊における言語教育は成人を対象にして、定められた制度の下で一定の指導方針に基づいて進められ、教育期間は限定され、かつ学習内容は厳選・専門化され、かつ迅速に効果的に最終目的にむけて遂行されなくてはならないはずであるが、実はこれは、現代の多くの日本語教育機関、特に大学進学を目指す日本語学校や大学内での日本語教育体制に比し、教育環境や学習目的の上で大差があるわけではなく、むしろ軍隊のそれは、そうした中の典型的なケースとってよいのではないか、ということである。

特に、ハプスブルク朝オーストリアの場合は、軍隊それ自体が他民族・多言語からなる集合体であったから、そこで実施された外国語教育は、日本を含めて近い将来やって来る、あるいは現に国内に存在する多民族・多言語社会での言語学習のあり方に示唆するものがあるだろう、というのが筆者の予感である。たとえそれが反面教師としての役であるとしても。

「一風景」としたが、「ヴェクセル（子供交換）」とは次元が異なり、異論があるかもしれない。司馬遼太郎の言葉『（官兵衛の生涯）は織田氏や豊臣氏という大風景の中の点景』（『播磨灘物語下』あとがき）を借りれば、ヴェクセルは「点景」で、軍隊は「大風景」というべきかもしれない。だが、現在の筆者の知識と分析は未熟の域を出ないので、特別な思い入れや一方に偏った評価はできるだけ排し、ハプスブルク朝下の軍隊内の軍人兵士の言語、そして主に軍人のための学校における第二言語教育の事実を、多くを諸家の著書・先行研究に抛りながら報告する。

2. ハプスブルク朝オーストリアの民族・言語・軍隊

本節では3節以下の前提となる歴史と国内状況を簡略にまとめる。本稿での「ハプスブルク朝オーストリア」とは、通例、日本語の多くの著書では「ハプスブルク帝国」または「オーストリア帝国」と呼ばれる中央ヨーロッパに存在した多民族・多言語国家で、第一次世界大戦終了(1918年)とともに各民族が独立の国家を形成したのと引き換えに、史上から姿を消したハプスブルク家の統治下にあった君主国・帝国のことである。

現在のオーストリアは人口約820万(2004年統計,「オーストリア政府観光局公式ガイドブック」より)であるが,1910年のオーストリア=ハンガリー二重帝国時代の総人口は5139万人,オーストリアには2857万人,ハンガリーには2089万,ボスニア・ヘルツェゴビナには193万人が住んでおり[大津留(2007) 57 p],民族別人口と全体比はドイツ系1200万(23.4%),ハンガリー系1006万(19.6%),チェコ・スロヴァキア系841万(16.3%),ポーランド系497万(9.7%),ウクライナ系400万(7.8%),セルビア・クロアチア系438万(8.5%),スロベニア系126万(2.4%),ルーマニア系322万(6.3%),イタリア系77万(1.5%),その他231万(4.5%)[Ernst(2010), p. 303]であった。以上の数字から明らかなように,ここではドイツ語,ハンガリー語,チェコ語,スロヴァキア語,ポーランド語,ウクライナ語(当時はルテニア語と言われた),セルビア・クロアチア語,スロヴェニア語,ルーマニア語,イタリア語が上記の比率で日常に使用され,同時にハプスブルク家の母語であるドイツ語が,統治者としての言語の位置を維持し続けた多民族・多言語の国家であった。

次に,ハプスブルク朝オーストリアの軍隊についての大まかな事柄を記すと,共通陸軍(gemeinsames Heer)の創始者はフリードリヒ公爵アルブレヒト・ヴァレンシュタイン(Herzog von Friedland, Albrecht Graf von Wallenstein/Valdstein)で,1634年に暗殺されるまでボヘミアの領主であると同時に,皇帝に代わる「戦争事業家」(Kriegsunternehmer)であった

が、彼の暗殺後は1918年に至るまで、皇帝 (Kaiser) が軍の最高司令官 (Obereste Kriegsherren) でありつづけた [Broucek: in Ernst (2003) 16 p.]。オーストリア=ハンガリー二重帝国になってから (1867 年) の体制では軍事は外交とならぶ共通業務であったから、帝国全土を防衛する任務は共通陸軍に与えられ、兵士は帝国全土から徴兵された。同時に、ハンガリー (いわゆるライタ川の東側) とオーストリア (ライタ川の西側) 双方に独自の国防軍の設置が認められた [大津留 (2007) 69 p.]

軍人は将校と兵士に大別される。オーストリア=ハンガリー二重帝国成立後、1868 年から国民には3年の現役、7年の予備役の兵役義務が課されることになった [Engelbrecht (1986) 321 p.]。1888 年に生まれた人が徴兵検査を受けた1909, 10, 11 年で見ると、このうち実際に兵役に就いた者は約12万人で、同じ世代の男子のほぼ4人に一人が徴兵された [大津留 (2007) 81 p.]。

共通陸軍の兵士総数は、1910 年の統計資料で149 万人 (予備役を含む。以下同様)、民族別ではドイツ系38 万 (25,2%), ハンガリー系34 万 (23,1%), チェコ・スロヴァキア系12 万 (16,5%), ポーランド系12 万 (7,9%), ウクライナ系11 万 (7,6%), セルビア・クロアチア系13 万 (9,0%), スロヴェニア系4 万 (2,4%), ルーマニア系10 万 (7,0%), イタリア系2 万 (1,3%) であった [Ernst (2010) 303 p.]。

一方、将校の数は1910 年統計で約1 万8 千人である。民族別割合はドイツ・オーストリア系78,7%, ハンガリー系9,3%, チェコ系4,8%, ポーランド系2,5%, ウクライナ系0,2%, セルビア・クロアチア系2,4%, スロヴェニア系0,5%, ルーマニア系0,9%, イタリア系0,7%となっている [Ernst (2010) 305-306 p.] (なお、この資料ではスロヴァキア系は空欄となっている)。このように、兵士についてはそれぞれの民族の人口にほぼ見合った数で全国土から徴用されたが、一方の将校については、80%近くをドイツ・オーストリア系が占め、二重帝国の一方の統治主体であるハンガ

リー系将校の割合も 10%に及ばず、チェコ系に至っては 5%以下であることがわかる。

以上の事実を踏まえ、多民族・多言語国家ハプスブルク朝オーストリアの軍隊においてはどのような言語が使用され、そのためにどのような言語教育、つまり他民族の言語を理解・習得するための外国語教育 (Fremdsprachenausbildung) が行われたか、さらに、そのためにどのような教材・教授法が用いられたかを次節以下で論ずる。

3. 軍隊の言語

ハプスブルク朝オーストリアの軍隊には、基本的には 3 種の言語が存在した。先ず挙げられるのは、連隊言語 (Regimentssprache) で、これは兵士の日常言語 (Umgangssprache) として歩兵連隊、騎兵連隊等の中で使用され、1 連隊で 4 言語まで可能であった。次に、指揮命令言語 (Kommandosprache) があり、兵士はさしあたり 80 語をマスターすることが求められた。マリア=テレジアによって命令用語はドイツ語のみで行われることが定められたが、ただ宣誓の文句はこの指示から除外された。さらに服務言語 (Dienstsprache) と名づけられるものがあり、これは軍関係機関や司令部との間の文書ないし口頭で用いられる言語で、これもドイツ語であった。以上の基本的な三種の言語のほかに授業言語 (Unterrichtssprache)、軍事法廷言語 (Militärgerichtssprache)、説教者の言語 (die Sprache der Predigt) があった [Broucek 15–16 pp. in Ernst (2003)]

命令語 (Kommandosprache) 80–100 語は一般的な意味での「言語」ではなく、所定の行動や目的のための、数を限定したコード (のようなもの) であり、実際、演習の場では士官または下士官が先ずドイツ語で命令を発した後、その内容を再び兵士の言語、つまり連隊言語で繰り返す (3 言語になる場合もあった) というシーンが見られた [Ernst (2010) 313 p.]。

またオーストリア=ハンガリー二重帝国成立並びに両国間のアウスグラ

イヒ（Ausgleich, 和協）の後のハンガリーは、ハンガリー語を命令言語とサービス言語に導入することを要求するようになり、その結果、共通陸軍とオーストリア国防軍においてはドイツ語、ハンガリー国防軍ではハンガリー語、クロアチア軍ではセルビア・クロアチア語が確定した [Ernst (2010) 308 p.]。

兵士の言語（民族言語）が、一つの連隊の中で連隊言語として認められるための最低限の割合は20%とされたが、1914年の共通陸軍とオーストリア国防軍の場合、1連隊=1言語という連隊は合計142、2言語の連隊は163、3言語は24、そして4言語の連隊もいくつか存在した。1言語だけの連隊142のうち、ドイツ語を連隊言語とするものは31であった。このことは、将校が兵士に向かって自分と共通する言語で話しかけ、命令を伝えることができるような連隊は10%に満たなかったということであり、言い換えれば90%以上の将校がドイツ語以外の他言語・外国語を少なくとも一つは理解できなくてはならないことを意味した。[Ernst (2010) 309 p.]

なお、民族言語として公式に認められた言語はドイツ語、ハンガリー語、チェコ語、スロヴァキア語、ルーマニア語、ポーランド語、ウクライナ（ルテニア）語、セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、イタリア語である。

以上、ハプスブルク朝オーストリアの軍隊における言語について最小限度の事実をまとめた。客観的に明らかになったことは、一般の兵士は連隊の中でドイツが分からなくてもそれぞれの言語で生活できたが、それと対照的に、ほとんどの将校は兵士の言語を、理解あるいは習得せざるを得ない不可避の状況があったということである。あわせて、アウスグライヒ以後のオーストリアとハンガリーでは事情が異なることを指摘した。

4. 将校の外国語能力とその養成

前節で述べたように、ハプスブルク朝オーストリアの軍隊にあつては、将校の外国語能力が不可欠であった。数字で示すと、将校は、1870年の時

点でドイツ語を含めると一人当たり 2.37 の言語を理解し、1904 年の調査では、一人当たり約 2.55 の言語であった。また、1870 年の時点でドイツ語以外で理解されていたのは第 1 位イタリア語 (32.76%)、第 2 位チェコ語 (30.18%)、第 3 位ハンガリー語 (19.77%)、第 4 位ポーランド語 (17.62%) だったが、1904 年にはチェコ語が第 1 位 (47.0%)、第 2 位ハンガリー語 (33.6%)、第 3 位ポーランド語 (19.3%) で、イタリア語は第 6 位 (8.5%) になった。[大津留 (2007) 72-73 pp.] [Ernst (2010), 311-314 pp.]

将校については 1870 年より人事記録が残されていて、そこには各人の個人データなどともに外国語の知識についての記載がある。また、軍法により、配置された連隊の連隊言語を習得するという指示に対応できない将校はきびしく処罰されると定められた。この判定は連隊に入隊後 3 年以内に行われ、万が一将校が試験に合格しなければ、さらに 2 年間の猶予期間が与えられ、再度不合格の場合は本人の昇進リストに「目下不適任」 „zur Zeit nicht geeignet“ とマークされる。そして、該当将校は他の連隊への転属を模索するか、または除隊するかの道を選んだ。しかし一般的には、遅かれ早かれ、ほとんどの将校が「業務に支障なし」 „zum Dienstgebrauch genügend“ の評価を得た [Ernst (2010) 310 p.]。

(筆者自身はこの人事記録を直接目していないが、現在、別な目的でオーストリア人将校の人事記録を調査しているオーストリア人歴史家ペーター・パンツァー氏が、これが事実であることを 2010 年夏に筆者に語ってくれた。蛇足ながら付記しておく)

以上、ハプスブルク朝オーストリア軍の将校の外国語能力について述べた。そこで本論の最大の課題である、かれら将校の外国語能力の養成 (Fremdsprachenausbildung im österreichischen Militär)、具体的には前節で述べた連隊言語の学習と習得であるが、それがどこで、どのように実施されたかについて考察することになる。なお、関連して、将校ではない一般兵士は「命令言語」並びに「服務言語」としてのドイツ語をどこで、ど

のように学ぶのか、あるいは学ぶことはなかったのか、といった疑問が必然的に浮かんでくるが、今回はその疑問に応じられるだけの資料がそろっていないので、後日を期し省略に従う。

5. ミリテア・アカデミーとその他の教育機関・学校

オーストリア国軍の創始者がヴァレンシュタイン (Wallenstein) であることはすでに述べたが、1624 年に彼は騎士アカデミー (Ritterakademie) を設立し、貴族の子弟の外に富裕層の子弟 60 人を入学させた。(それまでもドイツで 16 世紀中葉から将校養成機関または学校は存在していたものの、入学者は貴族出身者に限られていた。) ヴァレンシュタインはそこで教育、とくに外国語の教育、中でもイタリア語教育を重視したことが報告されているが、彼の死後 (1634 年) にアカデミーは閉鎖され、以後、オーストリアには特に取り上げるべき軍人養成機関は存在しなかった [Ernst (2010) 14-17 pp.]。

1751 年、オーストリア女王マリア=テレジアによってウィーンの南方の町ヴィーナー・ノイシュタット (Wiener Neustadt) に軍人養成のための高等教育機関ミリテア・アカデミー (Militärakademie, 訳せば「軍事アカデミー」) が創立され、これは現在も同市に存続する。入学を許可されたのは、裕福ではない若年の貴族、あるいは功勞のあった軍人の子弟であった。このミリテア・アカデミーは 1769 年に同アカデミーの予科ともいえる Militärische Pflanzeschule を統合し、正式名称 k. k. Theresianische Militärakademie (帝国/王立マリア=テレジア・ミリテア・アカデミー) となり、7 歳からの一貫教育が実施されることになった。当初は 7 クラス編成であったが後に 12 年制となり、最上級 3 学年において軍事科目が教えられ、一般課目と軍事教科科目との結合が図られた。なお、この時期には、軍事工科大学アカデミーと軍事医科アカデミーも創立され、女王マリア=テレジアと皇帝ヨーゼフ二世はこれらのアカデミーの設立により大学レベル以上の教育

を軍事分野で目指した [Engelbrecht (1984) 184–185 pp.]。

では、このアカデミーで行われた外国語授業について報告する。

1751年に創設されたミリテア・アカデミーでの授業は、翌年11月から開始され、チェコ語教育は初年度から開講科目に含まれていて、第3学年から教えられた。他の外国語科目では、フランス語は全学年で、ハンガリー語とイタリア語は第6学年から実施された。(ちなみに1717年創立の工科アカデミーは、その後帝国/王立工科アカデミーとして継続し、1784年よりチェコ語教育を開始している。)

ミリテア・アカデミーは、ナポレオン戦争後の1806年に大きな制度改革を行った。入学時の年齢は10–12歳となり、下級の3学年は廃止、収容総数は304人に縮小され、4中隊(Kompanien)からなる8年制となり、それは1830年には、さらに7学年とより高度内容の1年をプラスした体制となった [Ernst (2010) 111–113 pp.]。

ミリテア・アカデミーはその後再び400名の生徒を収容していたが、1852年に大々的な再編成が実施され、下級と上級の教育内容が分離され、ミリテア・アカデミーは上級4年間の教育に限定され、生徒数は1学年2クラス各50名(計100名)に縮小された。チェコ語はその後も継続して4年間授業が行われたが、下級の教育内容は新しく設立された軍事教育機関・学校に移管された [Ernst (2010) 159 pp.]。

参考までに主な下級軍事教育機関名を記すと、

Militär-Unter Erziehungshäuser (軍下級学校) 100名, 7–11歳

Militär-Ober Erziehungshäuser (軍上級学校) 50名, 15歳までに修業。

Schul-Companien (中隊学校) 在籍年限2–3年

Cadetten-Institut (士官候補生学校) 11–12歳の子弟が入学を許される。

4年またはそれ以上の修業期間。

ミリテア・アカデミーには、士官候補生学校卒業生の中からの優秀者と中隊学校修了生の最優秀者のみが16歳から入学を許された。

[以上, Engelbrecht (1986) 321-322 pp., Ernst (2010) 163-168 pp., 195 p., Broucek (2003) 18-19 pp. より]

実は, 1717 年から 1918 年の間の, ハプスブルク朝オーストリアの軍人養成の教育施設・学校は, 新設と統廃合, その結果の名称変更が繰り返されていて, エルンスト著『オーストリア軍におけるチェコ語教育並びにチェコ語軍事言語の歴史』[Ernst(2010)] に掲げられた「軍事教育機関一覧・系統図」Übersicht der Militär-Erziehungs-und-Bildungsanstalten (242-243 pp.) に基づき機関名称毎に一つと数え, それを単純に合計すると 58 にのぼる。また, それらの相互関係や役割分担は, 現時点では筆者には正確には把握し難い。エルンストはこれらのうち, 31 の機関・学校でチェコ語の授業が行われたとしているが, 詳細は不明である。

以上のことから, 当初ミリテア・アカデミーは, 幼年期を含む限られた貴族ないしは富裕層の子弟のための教育機関として出発したが, 直接的には 1848 年の国内外の政治変動を期に, この外に様々な軍人のための施設・学校が生まれ, それぞれに存続目的や入学条件が多様化していく中で, ミリテア・アカデミー自体は, 軍人養成学校の頂点にたつエリート的高等軍事教育機関へと切り替わっていった事実が明らかとなった。

したがって, 次節でミリテア・アカデミーでのチェコ語教育に焦点を絞り, その教育内容を検討するが, 同じアカデミーでのチェコ語教育といっても, 18 世紀後半から 19 世紀前半までと 19 世紀後半から 20 世紀にかけてのそれとでは教育対象に幅があり, 授業内容とレベルも異なるであろうという前提の下で, 将校のための最高教育機関ミリテア・アカデミーでどのような第二言語教育が行われてきたかをみることにする。

6. ミリテア・アカデミーにおける第二言語教育

ミリテア・アカデミーにおいて最初の授業が始まった 1752 年から, チェコ語教育は正規の授業科目であり, それは第 3 学年から行われた。因

みにハンガリー語とイタリア語の授業は6学年からであった。各100名の生徒からなる2中隊のクラス編成で、一方の中隊は貴族の子弟、他方は軍人の子弟であった。授業の一日の時間割は朝7時から夜7時まで12時間、チェコ語については、夏は1時から3時、冬は5時から7時まで教えられ、チェコ人教師2名が毎日これを担当した [Ernst (2010) 42 p.]。

この時期に教授資料または教材として利用されたと思われるものをエルンストは、その時のチェコ語教師の一人ヴィーデマン (Wiedemann) の遺品をもとに9点挙げている [Ernst (2010) 44 p.]。その中の辞書は後で話題となるので、著者と書名を下に記しておこう。

Daniel Adam von Veleslavin: Sylva quadrilinguis (Böhmisch-lateinisch-griechisch-deutsches Wörterbuch, 1598 oder 1683

ダニエル・アダム・ヴェレスラヴィーン著『チェコ語・ラテン語・ギリシャ語・ドイツ語辞書』

ミリテア・アカデミーの最初のチェコ語教師となったヴィーデマン (Wiedemann) については、ネヴェクラとエルンストに詳しい紹介と評価がある [Newerkla (2003) 65–68 pp., Ernst (2010) p. 43–45 pp.] が、ここでは、彼が22年の教師生活の間に、上記のヴェレスラヴィーンの辞書をモデルに仰いで、士官候補生の辞書(アルファベット順ドイツ語チェコ語辞書で、ドイツ語見出語13000語)を作成・刊行したことを記しておく。

この時期のアカデミーにおいてどのような教授方法がとられたか、確実なことは分らないが、食事中は授業で学んだ外国語で互いに会話をする事、説明の際はラテン語が用いられたこと、月末には作文が課され、翻訳作業が重視されたといった報告がある [Ernst (2010) 46 p.]。

1771年に新たな教育プランが導入され、1775年には12学年体制の下で一日の授業時間は低学年4時間、高学年6時間、チェコ語については1日おきの授業科目となり、授業はチェコ語で進められ、説明にはラテン語が用いられ、生徒には一定数の単語・文章の暗記が求められた。この時期の

チェコ語教師ズロヴィツキー (Josef Valentin Zlobický) は 1775 年にウィーン大学に招聘され最初のチェコ語教授となった。

1779 年から 1806 年にかけて 26 年余にわたり、伯爵キンスキー (Franz-Joseph Graf Kinský) がミリテア・アカデミーの校長 (Lokaldirektor) を務め、大きな改革を実施することになる。まず、アカデミーへの入学は 6 歳から 10 歳までの子供で入学試験が実施され、卒業と軍への入隊は 18 歳を過ぎてから、とした。外国語の授業は 5 年間さらには 6 年間 (第 4 学年から第 9 学年まで) 週 2.5 時間となった。もし生徒がすでにクロアチア語ないしはチェコ語ができる場合は、3 年次から 5 年次までフランス語を学び、6 年次から 8 年次のクラスではそれをクロアチア語とイリュリア語 (Illyrische) に翻訳する授業に切り換えられた。キンスキーには、子供は 5 歳で読み、7 歳で書くことを学ぶという基本的な考えがあり、さらに 7 歳で二つ以上の外国語を学ぶようにすべきだとの信念をもっていた。彼の時代のアカデミーでは、ラテン語、フランス語、イタリア語の外に、チェコ語、ポーランド語の授業があった。

キンスキー (Kinský) は自らがチェコ人であることを誇りとする人物であつたらしく、著作の中でチェコ語を言語教育の第一位におき、彼の母語でもあるチェコ語の擁護者であり推進者であつた。このことは石川達夫著『チェコ民族再生運動』に引用されたキンスキーの言葉からも確認できる [石川 (2010) 101-102 4pp.]。彼はチェコ語を学べば、ラテン語、ギリシャ語の習得にも有利だと考え、15 歳の年齢で古典語を理解し、ドイツ語、フランス語、チェコ語ができるべきだとした。キンスキーは教授法・言語習得法として、一日一外国語につき五つの単語を覚えること、その際生徒に *kleine Sprachschateln* (単語カード小箱) を用いることを勧めている。教師に対しては、文法規則を教えるにあたっては視覚的にチャート化して示す、すなわち直観授業を指示しており、コメニウスの『世界図絵』 (Komenskýs „Orbis pictus“) も利用されたことが報告されている [Ernst (2010) 81-88

pp.]

キンスキー (Kinský) は 1906 年刊行の J. ロース編著『教育百科辞典』(Enzyklopädisches Handbuch der Erziehungskunde: herausgegeben von J. Loos) において、スイスにペスタロッチを訪ね、ルソーに傾倒したと紹介されているような教育学者であった。しかしながら、この時代の全ヨーロッパを巻き込む政治状況と軍人キンスキー自身も指揮をとった戦争のためにアカデミーでのキンスキー不在が続き、その間のチェコ再生運動へのドイツ語側からの拒否ムードとアカデミーの中でのチェコ語への関心の低下により、1804 年にポーランド語教育と置き換えられ、後 1824 年に復活した。

なお、この間にアカデミーの修業年数は 12 年から 8 年、さらには 7 年へと変更され、下級学年を廃止した。1838 年の時点でチェコ語は、3 学年から 5 学年までは 4 時間、6 学年では 3 時間半、7 学年では 2 時間、より高度の 1 年コースで 4 時間教えられた [Ernst (2010) 112-113 pp.]。

ここで、まとめを兼ねて、各時期の教科科目一覧表の中から、言語科目名を取り出して示しておこう。

1752 年度 フランス語、イタリア語、チェコ語

1775 年度 ドイツ語、ラテン語、チェコ語、フランス語、イタリア語、

1813 年度 ドイツ語、ラテン語、ハンガリー語、ポーランド語、フランス語

1859 年度 ドイツ語 (修辞学、詩)、フランス語、イタリア語、チェコ語、ハンガリー語

1879 年度 軍事業務文、ハンガリー語またはチェコ語、フランス語

1908 年度 ドイツ語と軍事業務文体、ハンガリー語、チェコ語、ポーランド語、フランス語、イタリア語

[Ernst (2010) 235 p. の一覧表より]

ここまで、ミリテア・アカデミー創立から特に 19 世紀前半までの同アカ

デミーにおける第二言語教育、特にチェコ語教育の実施体制・教材・教授法をエルンスト Ernst (2010) の中から拾い読む形で取り出し紹介してきた。これにより、アカデミー在籍者の年齢、クラス規模、言語教育科目、授業時間、学習年限、教材や教授法の一部を示すことができたと考える。上記の数字を、日本語教育に限らず外国語教育に従事した者が眺めるならば、ミリテア・アカデミーでの言語教育の密度や成果はどのようなものであったか、すなわち、どの程度インテンシブで、どの程度学習内容の定着が期待できたか、といったことを経験に即して予測できるのではないだろうか。

ただし、前述のように、19 世紀に至り、ハプスブルク朝オーストリア軍の中の軍人養成教育機関はそれ以前とは性格を異にする拡大をし、ミリテア・アカデミー以外の学校が帝国内各地に設立され、また、これまでの軍人の子弟のための扶助機関としての役目が時代と政治にあわなくなってきたため、1852 年の改革により、ミリテア・カデミーに関しては下級学年の授業がその他の教育養成機関へと移された。従って上の数字は、ハプスブルク朝オーストリアの軍人養成機関における外国語・第二言語教育の全体像を写し出すものではない。個々の機関・学校に関してもかなり詳しい記述を行っているエルンスト (2010) をもってしても、これは明らかではないことを断っておきたい。

次節に入る前に、とりあえず、19 世紀後半から 20 世紀初頭、第一次大戦前夜の軍の諸機関・学校での言語と言語授業科目の一般的な状況を概略する。入学試験は、ミリテア・アカデミーと軍上級学校ではドイツ語で行われたが、軍下級学校では受験者の母語で行われた。ドイツ語の完璧な習得はどの機関・学校でも生徒に求められたが、学校（これは部隊でもあった）によってはハンガリー語が必須となった。また各学校の民族構成の割合に応じて、チェコ語、ポーランド語、クロアチア語、スロベニア語、スロヴァキア語を学ぶことが要求される一方、諸アカデミー（工科アカデミーなど

を含む)では、授業言語 (Unterrichtssprache) は、オーストリア共通陸軍の
 服務言語と同一であること、全ての軍の教育機関での言語教育の規格化な
 どが定められた [Ernst (2010) 236–237 pp.]。

なお、19 世紀後半からの、ミリテア・アカデミー、及びその外の軍の教
 育機関における言語教育内容の多様化・分散化・階層化に、同時期の各民
 族の自立と各言語の権利の要求運動が連動していることは、歴史を知る者
 であれば理解できることであろう。より広い意味での第二言語教育の必然
 性の解明を課題とする本稿は、この点に立ち入ることはしない。

7. ミリテア・アカデミーのチェコ語教師と教科書 (個別検討)

本節では、ミリテア・アカデミーにどのような教師がいて、どのような
 教科書・教材を作ったかを考察する。具体的には、ブリアン (Burian) と
 チェンスキー (Čenský) を取り上げる。筆者が二人の主要著作に直接当
 たって内容を検討できることが一つの大きな理由である。同時に、すでに
 ネヴェクラ (Newerkla) とエルンスト (Ernst) 両氏の分析と考察があり、そ
 れらを参考にブリアンとチェンスキーの言語教育思想とその著作が現代の
 言語教育からの評価にも耐えるものかどうか、さらには筆者の考える第二
 言語教育の普遍性につながるものかどうかについても考えることになる
 が、二人の教師の教科書と教授方法を検討することにより、キンスキー
 (Kinský) 後の 1830 年代から 1870 年代までのミリテア・アカデミーの第
 二言語教育思想と教育内容も具体的に把握されることになる。

A. トマーシュ・アクヴィン・ブリアン (Tomáš Akvin Burian, 1802–1874)

筆者がミリテア・アカデミーにおけるチェコ語教育に注目するに至った
 きっかけは、ウィーン大学スラブ学科ネヴェクラ教授 (Prof. Newerkla) の
 著書『ボヘミアの言語政策と言語事実—ボヘミア領内の学校におけるディ
 グロシア 1740–1918』 (Intendierte und tatsächliche Sprachwirklichkeit in
 Böhmen—Diglossie im Schulwesen der böhmischen Kronländer 1740–1918)

の中で先ず一番に分析の対象として取り上げられていたのがブリアンであり、彼の教科書だったからである。軍の教育機関で軍人が作成した教科書が現代の言語学者によっても高く評価されたばかりか、またアカデミー内のみならず、他の軍の学校、さらにはプラハ大学でも用いられたともネヴェクラ (1999) は書いている。軍人用の教科書がそのように広く用いられたのはなぜであろうか。

ブリアン (Burian) 著

『ドイツ人のための詳細にして理論的かつ実践的チェコ語教本』

(Ausführliches, theoretisch-praktisches Lehrbuch der böhmischen Sprache für Deutsche von Thomas Burian)

は初版 1838 年、その後版を重ねて 1859 年にも刊行されている。手元にある 1843 年版に拠りつつ、形態と内容上の特徴を挙げると次のようになる。

- ①目次 2 頁を含めて 523 頁の重厚なドイツ人対象のチェコ語教科書。
- ②中見出し (課名) はなく、項目に通し番号が付けられ、合計 318 項目。
- ③発音、文字・表記のあと、名詞、形容詞、数詞、動詞、代名詞、副詞、接続詞の順に文法事項が並び、各項目別に詳細な説明を付し、数項目毎にまとめてチェコ語文の読解練習、さらに頁を左右にわけ、左欄にドイツ語文、右欄に語句や文の一部のチェコ語訳をのせた翻訳練習文という形態が 441 頁まで続く。
- ④続いてテーマ別に並べられた必須語彙リスト約 3000。
- ⑤続いて 466 頁より 520 頁までチェコ語文章。ドイツ語対訳はない。

先ず中核をなす③の文法説明と練習であるが、構成・順序はラテン語文法を踏襲した、この時代の一般的なスタイルである。現今の第二言語教育ではほとんど使われないが、かといって完全に廃れたともいえない。特徴は、文法説明の詳細さと、とりわけ練習部分の分量の多さとそれが双方向の翻訳練習に限られていることである。この徹底ぶりは現代の言語教科書にはない。一切の疑問を残さないように始めから全てきちんと系統的に教

え、意味は翻訳を通して正確に理解しながら繰り返し練習して覚えこむやり方である。この徹底さは実践者の信念と成功の確信がなければ貫けるものではない。本書には初版から掲載されている 10 頁にわたる序文があるが、そこには著者の方法論と利用者への思いが簡潔かつ直截に表現されている。筆者が深く共感したことは、ブリアンが本書でオリジナリティを主張する気は全くない、ただ利用者の必要を考えて並べただけで文法分野での新知見はないと言い切り、そして利用者であるミリテア・アカデミーの士官候補生に向けては、将校と兵士が危険な場に直面した時に、兵士の母語で発せられた言葉は勇氣と献身と奇跡をもたらす、と直接呼びかけた部分である。後者の文意は人によって解釈が異なるだろうが、学習者・利用者の側に立ち、理論ではなく実用への認識と第二言語学習の目的が最も正直な形でそこに表現されていると筆者には思われる。徹底した実用性を目指す言語教育の中での徹底した双方向翻訳練習、現代からみると一見そぐわない組み合わせであるが、十分注目と検討に値する。

ネヴェクラ (1999) は、ブリアンの文法の解釈・処理に現代に通じる先駆性をみている。一方、エルンスト (2010) は、ブリアンの経歴と交友を以下のように伝える。ブリアンは砲兵学校を卒業後に軍の学校の教師となり、1831 年にアカデミーのチェコ語教授の職につき、1857 年の定年までこの職にあった。軍務にあった時からドイツ語チェコ語辞典を作ろうと考え、ドブロスキー (Dobrovský) の文法書にも親しんでいたという。ブリアンはチェコ人の友人・名士、 ユングマン (Josef Jungmann)、 アメリング (Karl Amerling)、 パラツキー (Fratišek Palacký)、 コラール (Jan Kollar) 等との交流があり、ユングマン編纂の辞書の軍事に関わる表現一覧表はブリアンの作ったものであった [Ernst (2010) 131 p.]。

このように彼は、特に軍事用語辞典の作成、そのための資料収集、チェコ語版命令言語の導入等にも力を注いだ。以上はエルンスト (2010) が 20 頁にわたって紹介したブリアンの一部に過ぎないが、そこに見られるブリ

アンは、職務に徹し、第二言語教育者のなすべきことを実行した人物であり、軍事分野であることを別とすれば、現代でも言語教師の模範とも言うべき、そのようなタイプの教師であったと思われる。

最後に、ブリアンが授業の中で用いた教材の一つとしてエルンストは *Svět v obrazech v osmdesáti dvou odděleních [Die Welt in Bildern in 82 Kapiteln]* (1779) を挙げている [Ernst (2010) 131 p.]。これは、いわゆるコメニウスのウィーン版『世界図絵』であろう。このことの意味については次節で触れることになる。

B. フェルディナント・チェンスキー (Ferdinant Čenský, 1829–1887)

1869 年、ブリアンの死後空席であったミリテア・アカデミーのチェコ語教師にチェンスキー (Čenský) が任用され 1885 年の定年まで勤め、その間に以下のチェコ語文法書、辞書、そして読本を編纂・刊行した。

① *Kurzgefasste praktische Grammatik der böhmischen Sprache für Deutsche*
『ドイツ人のための簡約実用チェコ語文法』1871

② *Vojenská čítanka, Militärisches Lesebuch* 『チェコ語軍事読本』1871

③ *Vojenský slovník německo-český, Militärisches deutsch-böhmisches Wörterbuch* 『兵士のためのドイツ語チェコ語辞典』1871

④ *Česká Čítanka Díl první* 『チェコ語読本第一』1884

⑤ “ *Díl druhý* 『チェコ語読本第二』1884

⑥ “ *Díl třetí* 『チェコ語読本第三』1885

①から③はプラハで、④から⑥はウィーンで刊行されているが、いずれも軍人の学校の、ないしは兵士のための授業用との副題がある。

彼の著作は評価が高く、国防省 (Kriegsministerium) によってその他の軍の学校においても使用することが定められた [Ernst (2010) 205 p.]。チェンスキーは「軍事のための専門チェコ語」を体系化し、その言語的基礎を作り、また、「軍隊文学」の分野を確立した [Ernst (2010) 204 p.]。この外にチェンスキーは、兵士のための服務規定のチェコ語翻訳や軍隊で用い

られる 8000 以上の軍事概念用語を集め刊行した [Ernst (2010) 207 p.]。

筆者の手元にコピーがある①から⑥までの著作に沿ってその特徴を考えると、まず、文法書①の序論においてチェンスキーは、a. 軍事に関する表現を取り入れた例文がこれまでのチェコ語教科書にはなかったからそれを取り入れたこと、b. 軍事に関する表現・語彙は文法規則と一緒に習得する方がよいこと、c. 言語教育には「アーン方式」(Ahn'sche Methode) がもっとも優れていること、d. 文法はブリアンほかの先人のテキストに従ったが、特にソコル (Sokol) をモデルにしたこと、などを述べている。

チェンスキーが①を著した 1871 年は、ドイツでヴィエトー (Wilhelm Viëtor) が後の直接法へとつながる言語改革運動 (Reformbewegung) の口火を切ることになった 1882 年に先立つ 10 年前である。やがて「文法翻訳法」の一つとして批判を浴びるアーン方式も、その頃は有効な教授法と見なされていたのであろう。ミリテア・アカデミーにあったチェンスキーが、外部世界の言語教授法にも目配りをしていたことがこれによってもわかる。

アーンの教授法の特徴は、①一つの文法事項毎に少ない語彙で一課を構成、②生活に即した、軽い内容の文を用いる、③短い文法を選び出す、④2 部構成とし、第 2 部において関連する歴史、手紙、各種慣用句や会話表現を練習する、[Aronstein (1926) 37 p.] であり、また、チェンスキーが範としたというソコルの教科書 (おそらく *Schule der böhmischen Sprache für Deutsche von Jos. Sokol* (1862) を指すと思われる) の序文でも、もっとも自然かつ容易な外国語教授の道はアーンの実用本位の教科課程 (praktischer Lehrgang) であると述べられており、チェンスキーの文法書①は、その点でまさしくアーンの様式で構成されている。違いは、軍事用語は入っているかないかであり、またこの点がチェンスキーを最も特徴づけている。

②は、文法と同時に印刷に付された読本であるが、文法説明や練習は含

まず読本としてすっきりとまとまっている。内容は4部構成で全体が軍事に関する内容で占められているのはチェンスキーの主張をそのまま反映するが、興味をそそるのは、第1部が箴言集 (Aphorismen) からはじまっていることである。クセノフォンから始まり、プラトン、モンテスキュー、マキアベリなど、有名無名の人物の名文句（と思われるもの）が、長短あわせて44編収められている。初級レベルの言語教科書読本の冒頭に、日常生活や仕事に関連する話題に先立ってアフォリズムをもってくるのは現代の言語教育者の感覚からすればまず考えられないが、こうしたセンスはチェンスキーのどこから出てきたのであろうか。そして第3部は、軍隊に関する唱歌8篇でこれも意表をつく。最後の第4部は会話集で、銃器の扱い方など兵士の軍事訓練に直結した会話がドイツ語にチェコ語を併記して左右対照で示され、これぞミリテア・アカデミーの教科書と思わせるものである。この軍事関連会話集は、④から⑥の読み物編の各巻の巻末にも豊富に掲載されている。

③の辞書も軍事専門辞書の特徴を如実に示す。アルファベット順で構成され一般辞書にあるような一般語彙も採用されているが、用例は軍隊・軍事に関連したものに限定されている。

④から⑥は、①から③の10年後に刊行された3巻本のチェコ語読本である。第1巻104編、第2巻109編、第3巻94編の読み物を収め、著者数は総計115名をくだらない。その中にはチェンスキーのものを含め、ブリアンの作品などアカデミーのチェコ語教師が書き下ろしたものが多く、タイトルから判断する限り、軍事訓練、軍体内の生活、戦争の歴史などの内容が多くを占めるが、作者の中にエルンストが「国防省の承認を受けた読本に、その名が現われると想像しにくいような多様な著者たちが登場する」[Ernst (2010) 211 p.]とわざわざ付け加えるような人物の書いた作品が採用されている。それは、例えば、次のような人たちを指す。

František Palacký, Svatopluk Čech, Božena Němcová, Jan Kollár, František

Ladislav Čelakovský, Jan Neruda, Karel Hynek Mácha, Karel Havlíček

筆者には上の2,3の名前だけは耳にしているものの、その他については知識がなくどの分野の人物かもよくは知らない。しかしながら、これらの名は石川達夫著『チェコ民族再生運動』(2010) [チェコ語書名 **ČESKÉ NÁRODNÍ OBROZENÍ** *Obrana rozmanitosti aneb ontologie malého národa*] で引用されている人物ばかりであり、こうした人々がチェコ語再生運動あるいはチェコ語擁護の歴史と文脈の中で登場し語られる、そのような人たちであったことは確かなようである。

さて、エルンストは名前を挙げていないが、実は、⑤の読本第2巻には、コメニウス (Komenský), ヴエレスラヴィーン (Veslavín), アメリング (Amerling) という筆者の関心をひきつけてきた人たちの作品が短編ではあるが採用されていることを見逃すわけにはいかない。このことについては次節でまとめて論ずることにする。

それにしても、ミリテア・アカデミーのチェコ語読本に軍事に関わる物語だけではなく、文人、詩人、文化人、ハプスブルク家支配に抵抗した思想家や活動家の文章をも取り入れたチェンスキーとはいかなる背景の教師だったのだろうか。エルンストは、チェンスキーの経歴・業績・信念を丹念に追跡し、それぞれに評価を述べ、それは実に23頁にも及ぶ [Ernst (2010) 196–218 pp.] が、ここでは上記の著作内容に関連することだけをかいつまんで紹介する。

フェルディナント・チェンスキー (Ferdinant Čenský) はチェコのチェフチツェ (Čechtice) に生まれ、プラハ大学哲学科に学んでいる。1848年のいわゆるウィーン革命騒ぎに際しては反体制運動の主唱者の一人としてこの運動に身を挺し、ハヴリーチェク (Havlíček) の発行した新聞の編集者として1851年に逮捕され、8ヶ月の拘留を経ての釈放後はそのまま軍に召集され、兵士としてヨーロッパ各地に配属され、転戦を繰り返した。その間、チェコ人兵士のためにドイツ語の命令言語や服務規程を翻訳したり、チェ

コ人兵士の教育を担当したりする一方、ドイツ人将校のためのチェコ語教育にもあたり、それらの活動が評価され、ブリアンの後は空席となっていたミリテア・アカデミーのチェコ語教授に 1870 年に任命された。(その時やっと最古参の中尉から大尉に昇進したという。)

この経歴を知れば、チェンスキーがアカデミーの教授になって 1 年目にしてすでに文法、辞書、読本をほぼ同時に刊行できる経験と力があつたこと、そして何よりも彼の編纂した読本に文筆家としての才能が生かされ、軍事関連の実用文の中に詩や文学を埋め込み、さらにはハプスブルク家やドイツ語に対してチェコ人・チェコ語の立場からの主張をそれとなく、あるいは堂々と盛り込んだチェンスキーの思想的背景が納得できるのではないだろうか。チェンスキーはまた、1858 年の従軍後は退役の機会があつたにも関わらず、軍隊に留まったという。それは、軍隊内のチェコ人兵士とオーストリア人将校との間のコミュニケーションのために、自己の言語教育者としての才能を生かすことが自分の使命と知ったからであろうと、エルンストはいう。

エルンスト (2010) は、チェンスキーの業績紹介を閉じるにあたりハヴエル (Havel) を部分的に引用しつつ次のように総括している。「チェンスキーの死後、彼の遺産は近代のナショナリズムの進展の中で時代に合わなくなっていった。1918 年以後そして 1948 年以後、チェンスキーの作品の意味は、反オーストリア行動が強調され、あるいは世間で言うところのチェコ民族の革命伝統が強調されることで、否定されてきた。しかしながら、19 世紀中葉のチェコ社会のオーストリア愛国主義は、近代の民主的なヨーロッパ連合の特徴の多くをすでその中に宿していた」。Nach dem Tod Čenskýs war sein Vermächtnis nicht mehr aktuell, hauptsächlich im Hinblick auf die rasche Entwicklung des modernen Nationalismus. Nach dem Jahr und auch nach 1948 wurde die Bedeutung von Čenskýs Werk teilweise durch die „Betonung des antiösterreichischen Widerstands und der sog. revolutionären

Traditionen des tschechischen Volkes negiert. Das österreichische Patriotentum der tschechischen Gesellschaft der Mitte des vergangenen Jahrhunderts beinhaltete jedoch viele Züge einer modernen und demokratischen europäischen Nation.“ (Havel 1995) [Ernst (2010) 213 p.]

筆者は、エルンストの評価とは別に、チェンスキーの中に現代も変わる事のない言語教育者の二面性と両者の統合の試みを見出す。二面性の片方は、実用性の徹底である。軍は、その是非はとにかく、戦場において相手に勝ち、生き延びて生命を保つ、あるいは国家・民族を滅亡させないという最終目的を持つ故、個人の生命維持であれ国家の維持であれ、教育も教材も、その現実目的に合致するよう構成され実施されるべきものであろう。チェンスキーは、その目的を文法・辞書・読本すべてにわたって完遂しようとした。

チェンスキーのもう一方は、言葉の教育のもつ普遍的価値の尊重である。それは実用目的に向けられていない。それは超民族的・超国家的なもので、その際の教材としては具体的には箴言集や文学作品などが用いられることになる。両者のせめぎ合いと統合は、これまで日本語教育用の教材作りを試みてきた筆者自身のささやかな経験に照らしても、見事なものであり、感嘆のほかはない。ただ、このようにチェンスキーを捉えることが正鵠を射たものかどうかは、チェンスキーの全作品を丁寧に読まなければ判断できないだろうが、現段階での総合的な印象として記しておきたい。

8. コメニウスの地平・コメニウスの輪

本節では、ブリアン、チェンスキーを検討する過程で強く感じる事になった興味深い事柄を、それを主張するには十分な検証が不足していると思うものの、しかし指摘するに十分値すると思われることを以下で述べる。それは、両者とコメニウスとの関連、あるいはコメニウスを中央にして広がる言語教育の地平のことであり、ブリアンもチェンスキーもその大

きな輪の中の、あるいはその山脈に連なる教育者たちと考えるとよいのではないか、という予感と確信である。

前節で指摘したように、ブリアン (Burian) はヴェレスラヴィーン (Veslavín) の辞書を所有していたし、さらに Jungmann, Palacký 等の他に、アメリング (Amerling) とも交流があり、授業ではコメニウスの『世界図絵』を教材の一部として使用した。(ただ、『世界図絵』のオリジナルは150章からなるので、ブリアンの周辺にあったのは82章に短縮されたウィーン版の『世界図絵』であったと推測される [井ノ口 (2008)]。) ヴェレスラヴィーンもアメリングも、時代は異なるがコメニウスとのつながりが深い [松岡 (2005), 松岡 (2006)]。

そして一番注目したいのは、3部で構成されたブリアンの主著『ドイツ人のためのチェコ語教本』の読解教材に、コメニウスの保護者・支援者であったモラヴィアの領主カレル・ゼロチーン (Karel z Žerotína) のコメニウス宛の手紙が掲載されていることである。内容については様々に解釈できるだろうが、ここでは、言語教育者の一人として、何を読解文として採用するかにはそれを選んだ人間の意図・信念、そして希望がこめられると示唆するだけにとどめよう。

一方、チェンスキー (Čenský) が編纂した3巻の『チェコ語読本』に取り上げた数多くの文章の作者の中には、コメニウスに影響を与えたヴェレスラヴィーン (Veslavín), コメニウスから影響を受けたアメリング (Amerling), そして、コメニウス (Komenský) 本人の名を見出すことができる。ただし、それは1編限りであり、文章も短い。だがそこにも、選択した教科書作成者のある思いが潜んでいることは間違いない。

ヴェレスラヴィーン、コメニウス、アメリングが並び、この3人という異なる形でブリアンとチェンスキーとがつながっているのを見ると、少なくとも言語教育の理念や方法に関して、彼らを精神的に結びつける何かがあることを想像するのは不可能ではない、と筆者には思われる。さらには

そこに第6節で触れたヴェレスラヴィーンの辞書を利用していたヴィーデマン (Wiedemann), 『世界図絵』を利用し直観教育を促した校長キンスキー (Lokaldirektor Kinský) も加わるかも知れない。

筆者は既に、ヴェレスラヴィーンの辞書とコメニウスの『言語の扉』(Janua linguarum) とのつながり, そして, コメニウスの『世界図絵』(Orbis pictus) 中の挿絵とアメリングの言語学習用絵教材との関連について述べてきた〔松岡 (2005), 松岡 (2006)〕ので詳細はそちらに譲り, 以下にブリアン並びにチェンスキーが読解として取り上げたコメニウスに関わる文章を全文掲載して, 参考ないしは今後の検討資料に供することにしたい。(日本語訳はチェコ・オロモウツ大学日本語学科教員渡辺隆行氏による。原文は古い表記で書かれているため, 現代式に書き換えていただいた。氏の全面的協力とご好意に感謝の意を表したい)

A トマーシュ・ブリアン『ドイツ人のためのチェコ語教本』512頁より

レシュノのヤン・コメンスキーに宛てたカレル・ゼロチーンの手紙
あらゆる物事が最高であるようにという祈りをこめて, また禁止とともに, すべてのやさしさあふれる神の儀式において, 友好の挨拶を伝えます。高き教育を受けし君, 我が格別に親愛なる友よ。

書かれたものが到着しました。そちらからまずオラヴァに行つて, そこから私のところまで, それもたったの二日の間に, 届いたことを考えると, 空を飛んでくるか, よほどの急使が持ってくるかしなければならなかったことでしょう。

神父たちにはご挨拶に感謝して, お別れに祈りを奉げます。残りは, できるだけ早く, できるだけいい形でけりがつくように私が配慮します。

しかし, そのためには時間が必要になります。私自身, あなたの助言が最高のもので, それを通してたくさんの苦難や, いくつもの不快を避けることができるのはわかっておりますし, その通りにするつもりです。

どうして、私が時間が必要になると確信しているかという、他のところと同様に、ブランディースにも改革の始まりが訪れました。イエズス会士が一人、司祭とともにやってきたのです。もし農奴たちが、その宗教のもとに従うことを欲しなければ、彼らのもとには軍人達がやってくることでしよう。

それが、どんな結果をもたらすでしょうか。お互いに邪魔しあわないように、事前に連絡を取り合わなければなりません。私たちは、こちらで軍人を恐れています。人を脅やかすものたちもいれば、喜ばせる者たちもいるのです。神よ、彼らから我々を守り、平穏を与えたまえ。

私の健康状態は、あなたがこちらにいらっしゃった時よりは多少よくなっております。それに対して妻のほう为重病にかかってしまいました。しかし私は神様がよくしてくださるという希望を持っております。神よ、そのようになさりましたまえ。

帝国内で起こっている出来事については、特にフリードラントの公爵や、ティリから、同様にノイベルクの侯爵からも聞いてご存知でしょう。春にはまたきれいに拭い去られると考えています。マントヴァが包囲されています。

皆様のご無事でありますよう、宜しくお伝えください。(この文のみ原文はラテン語)

1629年11月30日ヴラチラヴ

B フェルディナント・チェンスキー『チェコ語読本』第2巻より

8 平安の中心

(ヤン・アモス・コメンスキー)

世界はぐるぐる回っている。世界ではすべてがころころ転がっている。上へ下へ、こっちへあっちへ、そこではあらゆる場所を通ってすべてが歩いている。

歩かないにしても、飛び回り、倒れ、宙返りしている。

規則正しく歩くものは少なく、すべてが邪魔をしている。

ただ、世界の主（神さま）だけが、あらゆる物の上に、下に、あらゆる物を通して、歩き、ただ一人しっかりと立ち世界の永遠の支え。

永遠の中心にやってきた幸いな者達よ。永遠に、

神の御心の内に、自らの心の平穏を見出すことであろう。

（筆者注：この詩は 1663 年版の *Centrum securitatis* の中表紙に載り、チェコ語訳 *Hlubina bezpečnosti* が添えられた。1625 年の手稿版や 1633 年にレシュノで出版された版にはない。J. A. Comenius “CENTRUM SECURITATIS” (1964), Quelle & Meyer・Heidelberg. 14 頁参照)

A Burian's Lehrbuch (1843)

Pan Karel z Žerotína panu Janovi Komenskému, do Lešna

Pozdravení přátelské, s vinšem všech nejlepších věcí, i s zakázáním se ve všech přívětivých službách vzkazují, vysoce učený pane a příteli můj zvláště milý!

Psaní Vaše je mi dodáno; muselo letět, nebo rychlým poslem nešeno být, poněvadž nejprve od Vás do Olavy, potom odtud sem se dostalo, a to vše ve dvou dnech.

Otcům za pozdravy děkuji, modlitbám se poroučím, ostatek na péči mít budu, aby mohlo co nejlépe a co nejdříve k vyřízení přijít.

A však bude přece k tomu času potřeba. Sám sice na to přicházím, že rada Vaše je nejlepší, skrze kterou se ujde mnohým nesnázím a nejednomu nepohodlí; proto také ji následovat budu.

Proč jsem toto doložil, že času potřeba bude, je to, že jak jinde, tak i v Brandýse reformací začátek běže; neb se tam již i Jezuit jeden dostal s knězem, za kterými mají vojáci přijet, pokud poddaní nebudou se chtít v to náboženství

rejdivat.

Jaký to konec vezme, musí se vyrozumět prve, aby jedno druhému překážky nečinilo. My se zde vojáků bojíme; jedni straší, druzí těší; pánbůh rač od nich pomoci, a pokoj dát.

Zdraví mé (o) něco lepší je, než tehdy, když jste zde byli; (o)proti tomu žena má roznemohla se těžce; mám však naději k Pánu Bohu, že se i s ní polepší, což rač on způsobit tím spíše.

O verbuncích, které se v říši dějí, zvláště od knížete z Frýdlantu a od Tilliho, jakož i od knížete z Neuberku, nepochybni že vědomost máte.

Smýšlím, že se na jaro opět dobře setrou. Mantova je obležena.

Saluta omnes, quibus salus cordi est.

Dán ve Vratislavi, 30. listopadu 1629

B Ferdinand Čenský, Česká Čítanka Díl druhý (1884)

8. Hlubina bezpečnosti

(Jan Amos Komenský)

Svět se točí vůkol, vůkol v světě všecko se váli

vzhůru, dolů, sem, tam v něm všudy všecko chodí.

Ač nechodí, litá, kácí, převrací se kotrlcem,

málo co svým řádem kráčeje, všecko maní.

Sám jediný světa Pán nade vším, pode vším, skrze všecko

jda, světu sám věčná podpora pevně stojí.

Ó blaze, kdož v centrum věčném usadí se! Na věčnost

v srdci božím svému srdci nalezne pokoj.

9. あとがきと内容要約

ハプスブルク朝オーストリアが多民族・多言語国家であり、軍隊もまたその縮図であったこと、そこでは将校も兵士も母語以外の言語を学ぶことが不可避であったこと、将校についてはその養成機関である軍の学校で外国語の授業が行われてきたこと、ことに士官学校ミリテア・アカデミーではチェコ語が重視され、すぐれた教師が輩出し、すぐれた教材が生み出されたこと、そしてこれらは、コメニウスを始めとするチェコの言語教育の伝統と同じ地平にあるのではないかということを述べた。

なお、本稿はハプスブルク朝オーストリアの軍隊ないしは軍の教育機関・学校すべてにおける第二言語教育を考察の対象としたものではない。そうしたところで具体的に第二言語の授業がどのように進められ、教科書がどのように使われたか、そしてどのような成果が上がったか、といった点は、現時点では資料が限られているため踏み込むことができなかった。それらはすべて今後の課題としたい。

Zusammenfassung

Ich habe meine Abhandlung mit dem Titel „Tschechischunterricht in der Militärakademie in der Zeit der Habsburgermonarchie—ein Beispiel für Zweitspracherziehung in einer vielsprachigen Gesellschaft (2)“ aus der Überzeugung heraus geschrieben, dort ein beispielhaftes Modell für institutionalisiertes, methodisches und intensives Fremdsprachenlernen zu finden. Zuvor hatte ich in meiner letzten Abhandlung „Wechsel: Ein Beispiel für Zweitspracherziehung in einer vielsprachigen Gesellschaft“ über den sogenannten „Kinderwechsel“ als Methode des Fremdspracherwerbs in Mähren und Niederösterreich berichtet, der ganz im Gegensatz zum Fremdsprachenunterricht in Institutionen steht.

In den Abschnitten 1 bis 5 behandle ich Charakteristika und Fakten des

Vielvölkerstaats der Habsburgermonarchie und der daraus resultierenden Vielsprachigkeit der österreichischen Armee. In Abschnitt 6 werden Geschichte und Lehrpläne des Fremdsprachenunterrichts in der Militärakademie beschrieben. Dabei stütze ich mich in erster Linie auf die Schriften von Dr. Josef Ernst und zum Teil auch auf jene von Prof. Stefan Michael Newerkla. Es ging mir dabei darum, die für den japanischen Leser nötigen Daten und Kenntnisse heraus zu suchen und ihm zusammenfassende Informationen zu liefern. In den Abschnitten 7 und 8 habe ich mich mit den Lehrbüchern von zwei Sprachlehrern für die tschechische Sprache an der Militärakademie, Burian und Čenský, beschäftigt, den Aufbau ihrer Lehrbücher untersucht und ihre universelle Bedeutung von meinem persönlichen Standpunkt als Sprachlehrer unter Berücksichtigung meiner eigenen Erfahrungen aus betrachtet. Ich schließe meine Abhandlung mit der Behauptung, dass Burian und Čenský auf eine gemeinsame Ebene mit den großen Sprachlehrpädagogen Komenský, Veleslavin oder Amerling gestellt werden können und füge zwei Leseproben aus Burians und Čenskýs Lehrbüchern hinzu, die einen Zusammenhang mit Jan Amos Komenský aufweisen. (Übersetzung ins Japanische: Hr. Watanabe von der Universität Olomouc.)

参考文献

- Aronstein, Philipp (1926), *Methodik des neusprachlichen Unterrichts, 1. Band*, B. G. Teubner, Berlin.
- Broucek, Peter (2003), *Die Mehrsprachigkeit und Sprachenpolitik in den Einheiten der k. und k. Armee in den böhmischen Ländern*, In: *250 Jahre Fremdsprachenausbildung im Österreichischen Militär am Beispiel des Tschechischen*, Symposium 2–4. Oktober 2002, Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Engelbrecht, Helmut (1984), *Geschichte des österreichischen Bildungswesens–Erziehung und Unterricht auf dem Boden Österreichs, Band 3. Von der frühen Aufklärung bis zum Vormärz*, Österreichischer Bundesverlag, Wien.

- Engelbrecht, Helmut (1986), *Geschichte des österreichischen Bildungswesens-Erziehung und Unterricht auf dem Boden Österreichs, Band 4. Von 1848 bis zum Ende der Monarchie*, Österreichischer Bundesverlag, Wien.
- Ernst, Josef (2010), *Die Geschichte des Tschechischunterrichts und der Tschechischen Militärfachsprache im Österreichischen Militär*, Sprachinstitut des Bundesheeres Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Ernst, Josef (2003), *Der Tschechischunterricht an der österreichischen militärischen Ausbildungsstätten im 18. und 19. Jahrhundert*; In: *250 Jahre Fremdsprachenausbildung im Österreichischen Militär am Beispiel des Tschechischen*, Symposion 2-4. Oktober 2002, Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Loos, Josef (1906), *Enzyklopädisches Handbuch der Erziehungskunde in zwei Bänden*, Verlag von A. Pichlers Witwe & Sohn, Wien und Leipzig.
- Husová, Marcella (2003), *Der Spracherwerb tschechischer Soldaten in den k. und k. Garnisonen 1882-1996, in den böhmischen Ländern*, In: *250 Jahre Fremdsprachenausbildung im Österreichischen Militär am Beispiel des Tschechischen*, Symposion 2-4. Oktober 2002, Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Newerkla, Stefan (1999), *Intendierte und tatsächliche Sprachwirklichkeit in Böhmen/Diglossie im Schulwesen der böhmischen Kronländer 1740-1918*, Universität Wien, Wien.
- Newerkla, Stefan Michael (2003), *Der österreichische Beitrag zu den Anfängen und Grundlagen der tschechischen Militärterminologie*, In: *250 Jahre Fremdsprachenausbildung im Österreichischen Militär am Beispiel des Tschechischen*, Symposion 2-4. Oktober 2002, Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Petrbok, Václav (2003), *Der literarische Beitrag von Tschechischlehrern und tschechischen Absolventen der Theresianischen Militärakademie*, In: *250 Jahre Fremdsprachenausbildung im Österreichischen Militär am Beispiel des Tschechischen*, Symposion 2-4. Oktober 2002, Landesverteidigungsakademie, Wien.
- Spáčil, Vladimír/Spáčilová, Libuše u.a. (2002), *Deutsche Sprachbücher in Böhmen und Mähren vom 15. Jahrhundert bis 1918*, Walter de Gruyter, Berlin/New York.
- 石川達夫 (2010) 『チェコ民族再生運動—多様性の擁護,あるいは小民族の存在論 (ČESKÉ NÁRODNÍ OBROZENÍ Obrana rozmanitosti aneb ontologie malého národa)』岩波書店
- 井ノ口淳三 (2008) 「18世紀ウィーンで出版された『世界図絵』の異版本について」『追手門学院大学心理学部紀要』第2号, 追手門学院大学
- 大津留厚 (2007) 『増補改訂ハプスブルクの実験—多文化共存を目指して』春風社
- W. M. ジョンストン著井上修一他訳 (1986) 『ウィーン精神 1—ハプスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』みすず書房

- 松岡 弘 (2005) 「テーマ別分類による辞書並びに第二言語教科書—J. A. コメニウス著『開かれた言語の扉』の周辺—」『一橋論叢』133号, 一橋大学
- 松岡 弘 (2006) 「絵」の中の言語教育—コメニウス・パセドウ・アメリング, そしてヘルツェル—」『日本語と日本語教育』第34号, 慶應義塾大学
- 松岡 弘 (2009) 「ヴェクセル: 多言語社会の中の第二言語学習の一風景」『日本語と日本語教育』第37号, 慶應義塾大学

補論: ハンガリーのヴェクセル (子供交換)

筆者は本紀要第37号 (2009) において「ヴェクセル: 多言語社会の中の第二言語教育の一風景」と題して, 主に19世紀から20世紀にかけてチェコ・モラヴィア地方と下オーストリア州の間で相手方の言語習得を目的にお互いの家族の間で子供を一定期間交換する風習があったことを報告した。その際, 主に当事者の残した回想録やオーストリア人研究者の調査に依拠し, チェコ人またはスロヴァキア人とドイツ語を母語とするオーストリア人との間の交換だけを取り上げたが, ここでは, この風習が同時代のハンガリーにおいても, ハンガリー人, スロヴァキア人, ドイツ・オーストリア人の間で行われていたことを報告する。

ハンガリーは, チェコと同じくハプスブルク家支配下の領邦国であったが, 1867年以後1918年まではオーストリア=ハンガリー二重帝国として軍隊と外交は共通とするもののほぼ独立国家であり, オーストリア国側に含まれたチェコとは状況が異なっていた。例えば, 多民族・多言語国家ではあったが1844年まではラテン語を公用語とし, その後は次第にハンガリー語がその位置を占め, 学校においてはこれが授業言語となった。またオーストリアの国家基本法にあるような第二言語学習に関する規定はなく, それは各人の自由意志に委ねられていた [László (1987) 85 p.]。

ハンガリーのヴェクセル (これはオーストリアとチェコ間の呼称であるが, 本稿でも便宜上これを使う) に関する報告文献は, Nagy がハンガリー・ルーマニア間のそれを扱った1965年の論文に始まる [Liszka

(2003)]。これによると 10 編ほどの関連論文が発表されているようであるが、本稿では基本的に László Kósa (1987), József Liszka (2003), (2009), Joachim von Puttkamer (2003) に依拠してその中のいくつかの事例を報告する。

ハンガリーではヴェクセルは 16 世紀末からカラパチア盆地で既に始まっている習慣で、もっとも古い記録は Máton Szepesi Csombor が 1620 年に刊行したヨーロッパ紀行記があり、1607 年に生まれ故郷の南スロヴァキアから Kásmark の小学校にドイツ語を学びに出かけたとある [Liszka (2003) 221 p.]。しかしながら本格化したのは 19 世紀であり、またハプスブルク帝国解体後も、例えば、南スロヴァキアのハンガリー人居住区の Farnad を例にとり、1934 年から 1935 年にスロヴァキア人の少女をヴェクセルで数週間預かり、自分の息子にはスロヴァキア語を学ばせるために送り出した人の思い出が紹介されている [Liszka (2003) 228 p.]。その外、前稿で取り上げたヴェクセルに似た様々な事例があつて、ヴェクセルがチェコ人とオーストリア人の間に特有のものでないことが確認された。ここでは一つ、Paládi-Kovács の報告を追加しておこう。第二次世界大戦後にスロヴァキア内のハンガリー人が追放された時期に、子供を交換し合ったスロヴァキア人家族がハンガリー人の家族に援助の手を差し伸べたという事例であり、そうした親戚付き合いは 1970 年代まで続いたという [Liszka (2003) 230 p. より引用]。なお、Liszka (2009) は、ヴェクセル=子供交換は、実は 19 世紀末まで、北はスカンジナビアから、イギリス、中央ヨーロッパ、イタリアに至るまで行われていて、さらにはヨーロッパの他にニューギニアでも行われているという Tibor Bodroj の報告も引用している。このように、ヴェクセルは今、地球規模で調査の必要があるテーマとなっているようだが、本稿ではハンガリー国内のヴェクセルの事実の簡単な報告にとどめた。

なお最後に一つ、私事にわたるエピソードを追加することをお許しいた

だきたい。筆者と長年の交友関係にある前ボン大学日本学科教授ペーター・パンツァー氏 (Prof. Peter Pantzer) の父君はオーストリア・ブルゲンランド州ネッケンマルクト (Neckenmarkt) 村の出身である。ここはハンガリーの国境に近く 1920 年代まではハンガリーに属していた。2010 年の夏にそのパンツァー教授が、教授の父方の祖父が子供の頃に実際にヴェクセルに出たというのを直接本人から聞いたと、筆者に話してしてくれた。Hannelore Burger (1995) の指摘、そして Vielhauer (1978) 等の調査分析を通して観念的に理解していたに過ぎないヴェクセルが、初めて身近な出来事と感じられた瞬間であった。

参 考 文 献

- László, Kósa (1987), *Kinderaustausch und Spracherlernen in Ungarn*, In: *Hungarian Studies* 3/1-2, 85-93, Akadémiai Kiadó, Budapest.
- Lizska, József (2003), *Kinderaustausch als Methode des Fremdsprachenerwerbs*, In: *Volkskunde der Ungarn in der Slowakai, zwischen den Karapaten und der Ungarischen Tiefebene*, 219-238 pp., Lehrstuhl für Volkskunde der Universität, Passau.
- Lizska, József (2009), *Kinderaustausch als Methode des Fremdsprachenerwerbs. Argumente und Gegenargumente zur Bewertung eines Phänomens*; In: Petr Lozoviuk (Hg.) (2009), *Grenzgebiet als Forschungsfeld*, Leipziger Universitätsverlag GMBH.
- Von Puttkamer, Joachim (2003), *Schulalltag und nationale Integration in Ungarn. Slowaken, Rumänen und Siebenbürger Sachsen in der Auseinandersetzung mit der ungarischen Staatsidee 1867-1914*, Oldenbourg Verlag, München.